

令和六年 新春火曜午餐会 新春吉例 講談会

企画：株式会社伝播堂 協力：上方講談協会 上方講談谷四座



旭堂南舟

現在、二つ目の講談師ですが、
本年真打昇進。
岸和田市を中心に活動中。
南大阪唯一の講談師！



旭堂南歩

令和元年に入門し、昨年二つ目
にスピード昇進。
草の根活動を大切にする講談師
で持ちネタは50本以上で、真打
目指して爆進中！

上方講談谷四座 YouTube チャンネル ご案内

いつでも創作講談を
お楽しみいただける
講談 YouTube チャンネル誕生！
『上方講談谷四座』
で検索してください
スマホからはQRコードで
チャンネル登録・高評価ボタンも
お願いします。



2024年1月16日火曜日。
朝方に雪がちらついていたものの、
日中は晴天に恵まれた冬の穏やかな
この日に、新年午餐会を開催いた
しました。

今年も新春吉例となりました
「講談」を株式会社伝播堂の企
画・協力により上方講談協会から
講談師の旭堂南舟（きょくどうなん
しゅう）氏と旭堂南歩（きょく
どうなんぽ）氏両氏をお迎えして
ご口演いただきました。

今回は3年目ということで、ほ
とんどの方は過去に参加されてい
ましたが、お正月の景気付けとし
て今年も張扇で修羅場読みを旭堂
南歩氏と一緒に行って頂きました。

皆様にも大きな声を出して頂
き、一緒に張扇を打つと言った光
景は、清々しく壮観であり、今後
はお正月の風物詩となるでしょう。

引き続き、旭堂南歩氏の講談と
なります。古典講談より「雷電の
初相撲」を口演頂きました。

<雷電の初相撲／あらすじ>

江戸時代でもっとも相撲の盛ん

だったのは寛政年間である。横綱
は谷風梶之助、小野川喜三郎、そ
して横綱以上の実力があつたと言
われているのが雷電為右衛門（ら
いでんためえもん）である。

雷電は信州の片田舎で育ち、一
旗あげようと江戸へ出てくるが、
浦風林右エ門に弟子志願をする
も、対応が気に入らず出てくる。

その夜、宿屋の親父から谷風を
紹介され翌日谷風部屋を訪れる。
雷電の身体を見た横綱の谷風は感
心して、自分のところへ預かるこ
ととした。

『一枚あばら』というからあば
ら骨が太く、一枚の板のように見
える。また、谷風の部屋で雷電は
みっちり稽古をする。すでに三役
くらいの実力があるのだが、初土
俵でいきなり三役というわけには
いかない。谷風は年寄と相談し、
張出の幕内として土俵に上がるこ
とになる。

初土俵は小野川部屋の関脇、八
角との対戦である。八角に左を差
させると大変な力が出る。雷電に
はどんなことがあっても左を差さ
せてはならない、右肘を固く脇腹
に付けるよう助言する。観客は雷

電が三役力士と当たるということ
で盛り上がっている。八角の背丈
は六尺五寸、雷電はそれよりも大
きい。場内が沸きあがるなか、勝
負が始まる。両者立ち上がって
突っ張りあう。雷電は八角がどれ
ほど力があるのか試してみようと
右手を大きく上げる。八角は左を
取りに来たところを雷電の高く上
げた右手が八角の頬を叩いた。た
まらず八角がぐらつく土俵に倒
れ込んだ。雷電に軍配が上がる。
観客は大歓声を上げる。倒れた八
角は立ち上がれない。小野川部屋
の若い衆が大勢駆け付け、抱えら
れて退場する。手当の甲斐もなく
八角は翌日息を引き取った。小野
川は年寄にあんな危ない手は使う
べきではないと訴える。訴えが認め
られ、雷電の張り手は封じ手にな
る。初土俵から封じ手を言いつ
かったのは雷電くらいである。

雷電は門（かんぬき）と鉦（な
た）が封じ手になる。しかしそれ
でもますます強みを発揮して、史
上最も強い力士として後世に名を
残すのであるが、横綱昇進の際に
初土俵で八角を張り倒し死なせた
ことを理由にこれを断るのである。

<正直俵夫>

自動車などなかった明治時代の
話。

二月の半ば、朝から降り出した
雪は夜にはますます強まり、東京
の街は一面の銀世界であった。

神田の和泉橋で一人の人力車の
俵夫が客待ちをしている。そこへ
通りがかった稲垣という巡査が話
しかけてくる。この俵夫は股引き
を履いていない。聞くと、家には
女房、母親、倅と三人がいるが食
べさせる米がないので質屋に入れ
てしまったと言う。巡査は夜にも
関わらず、質屋に行って金を立て
替えて股引きを請け出してくれた。
恩を受けた人を忘れてはなら
ないと俵夫は巡査の顔をしっかりと
見つめる。雪のなか帰っていく若い
巡査。幾度も礼を言いながら見
送る俵夫の庄吉。

翌日も朝から庄吉は懸命に働
く。仕事が終わって庄吉が風呂屋
に行っている間、女房は車の手入
れをする。すると車の布団の間か

ら財布を見つけた。最後の客が忘
れていった物らしい。庄吉が返し
に行く。

お客は喜び礼にと百円を庄吉に
差し出す。「金が欲しくて届けた
のではない」と言って断って帰っ
て行った。

翌日、庄吉の家に昨夜財布を届
けた客が訪ねて来た。お礼の代わ
りにと十台の車を庄吉に渡した。
庄吉は大層喜んで礼を言った。庄
吉は十台の車の親方となっても梶
棒を握っており生活にも余裕がで
てきた。

その年末の夕暮れ時、庄吉はや
せ衰えボロボロの男とすれ違っ
た。この人はあの時の巡査さんで
ないか。庄吉は男に話しかけると
確かにあの時の巡査の稲垣であつ
た。

聞くと、あの夜、署長になぜ帰
りが遅くなったかと尋ねられ、そ
の夜の出来事を話すと、仕事に私
情を挟んではならぬと叱られ、警
察を免職になったと言う。山と山
とは出会わぬものだが、人と人と

は出会うもの。庄吉は車に稲垣を
乗せ、自分の家に連れて行く。
ちょうど二階の部屋が空いていた
ので、ここを貸し与え、一緒に事
業を拡大していく。

講談に関するお問合せは

上方講談協会／事務局
株式会社伝播堂
info@denpado.com
FAX：072-637-0009
〒567-0861
大阪府茨木市東奈良二丁目14-13

協会公式サイト



ご当地講談承ります。

ご当地の偉人や逸話などを題材
として講談を創作します。